各駅停車・大分県歴史散歩

ふるさとの駅

(18) バス路線 野津原・今市、志高湖・牧の戸・筋湯

初版：2007 年 6 月 22 日

Next

㊼ バス路線 (1)

鉄道のない 30 市町村

◀「青の洞門」を走り抜けるバス

■県民の足として

大分県内には 81 の国鉄駅があり、28 の市町村に鉄道が通じている。しかし、これは全 58 市町村の半数にも達しない。したがって、重要な交通機関としてバスに頼る割合が極めて高いといえる。そこで、「各駅停車」の一環として特に「バス路線」の章を設け、鉄道のない 30 市町村を中心に、主要バス路線のいくつかの停留所を加えて歴史散歩を試みることにした。

現在のバス路線のなかには、かつて民営の鉄道が通じていたところもある。例えば耶馬渓、国東半島、宇佐、佐賀関半島などである。このほか大分～別府間には電車も走っていた。しかし、これら私鉄は、自然災害によって被害を受けたり、経営難などのため、近年になって相次いで姿を消した。

現在のバス事業も経営は楽ではない。都市の一部

●この電子ブック「ふるさとの駅」＝各駅停車・大分県歴史散歩は、昭和 58(1983) 年 7 月 20 日から翌年の 1 月 28 日までの約半年間、115 回にわたり大分合同新聞に連載されたものです。25 年後の今年、電子ブックとして復刻しました。

したがって記事中の「いま」や「現在」は 25 年前の状況を示しており、その後駅名の変更や路線の廃止などもありますが、当時を思い浮かべながらお読みいただきお楽しみください。

路線を除けば、過疎地を主体にほとんどが赤字路線であり、バス会社は貸切バスのほか多角経営が路線バスの赤字をカバーしている状態である。主な理由は自家用車の普及と、過疎にともなう利用客の減少だ。このため辺地路線のなかには廃止寸前まで追い込まれているものも少なくない。

だが、利用者は減っても、バス路線の役割が終わったわけではない。大分県民の足としての重要さには全く変わりはない。「各駅停車」が、ふるさとの駅を見直す手助けとなるならば、「バス路線」もまた、県民の足を考える一助としてほしいものだ。

「バス路線」を地域的にいくつかに分けてみた。

「大分近郊」は、かつて肥後街道の重要な宿場でありながら、鉄道に縁のない野津原町を取り上げる。

「九州横断道路」は国鉄駅を持つ市町村を走るが、観光的にみて大分県の重要ルートとして主な地点を

■バス各社の主要運行地

大分県下の路線バスは、いわゆる〝バス４社〟の車が中心となっている。大分バス、大分交通、亀の井バス、日田バスの各社である。各社の路線は一部地域で重なりあっているし、相互乗り入れなども行われているが、主な運行範囲をみると、大分バスが大分市郡から県南部、豊肥地区、大分交通が大分市から県北部と久大地区の一部で、この２社で県の南北を２分したかっこう。続いて亀の井バスが別府市を中心として主要道に路線を延ばし、日田バスは日田地方を主体に玖珠にも路線を持つ。このほかでは、国鉄バスが大分市東部から北海部、臼杵、大野郡の一部を走っており、西鉄バスなど県外社も一部に乗り入れている。さらに九州横断道路だけを走る九州国際観光バスがあるし、地方自治体のバスも辺地の一部に運行する。なお、別府、宇佐、国東、耶馬渓、大野地方などに定期観光バスが運行されている。

紹介する。

「国東半島」は杵築市を皮切りに、半島のまるい海岸線を東から西へとたどり豊後高田市まで。ここは六郷満山と呼ばれる古代仏教文化の地であり、近年、観光でもクローズアップされた地域である。かつては陸路の便の悪さから陸の孤島とまでいわれたものだが、最近は道路の改良、新設も進み、ぐんと便利になったばかりか、大分空港も設けられて大分の空の玄関となった。

■経済、文化の浮揚に

「宇佐山郷」は駅館川の上流となる地域で、院内谷と安心院盆地。古代宇佐文化と密接なかかわりを持つところであり、豊前国と豊後国を結ぶ古い道はこの地を経由したと推定されるなど、いろいろな面で興味深い地である。

「耶馬渓」はいわずとしれた天下の名勝。山国川水系の源流となる山々が折り重なるように立ち並び、いたるところに南画風の岩山と清流、それにまつわる紅葉の美観を見せる。その景観も決して一様ではなく、地区によって地質の違いから多様な変化を見せており、谷ごとに耶馬 10 渓などと分けられている。

「南海部」は佐伯市以南の海岸 3 町村と内陸 2 町村がバスに頼っている。海岸部は半島と入り江がリアス式特有の複雑な入り組みをみせ、内陸部は山また山の連なりで、ともに平地は少なく、道路はカーブのくりかえしである。

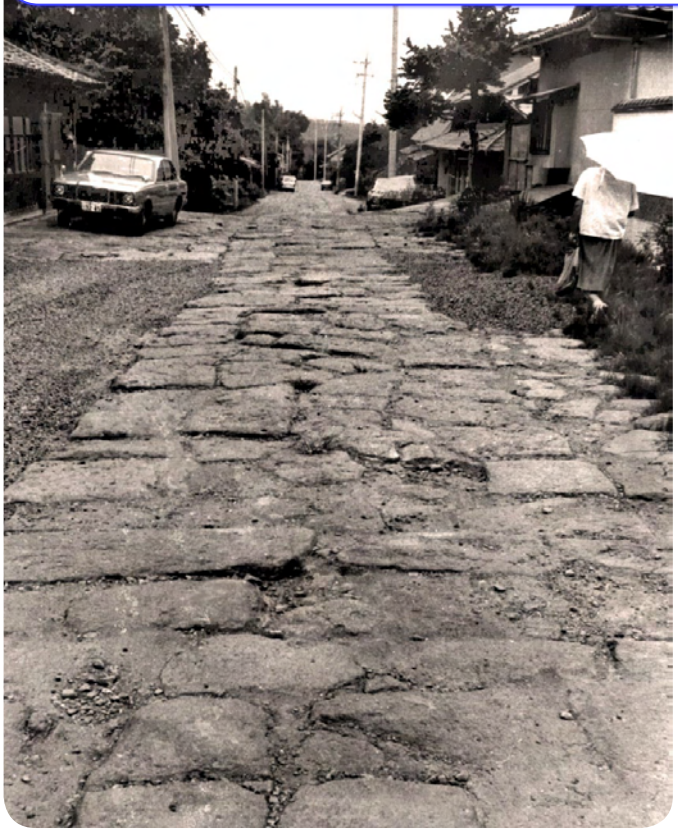
「津江地方」は日田盆地の南。筑後川の本流である大山川、支流の津江川の流域で、大山町と前、中、上の津江 3 村である。津江山と総称される山岳地帯で、日田杉の美林に覆われる。

「大野・直入」は国道 10 号線の野津町と同 57 号線の千歳村、大野町、さらに九重山群の南に展開する久住、直入の両町。ひだなす山河の地から広い草原にかけて、自然と文化が溶けあっている。

バス路線に頼る地域は、そのほとんどが過疎地である。そのための悩みは多いが、それだけに経済、文化の浮揚を目ざす意気込みは強く、古くからの伝統に新しいエネルギーを加えて町づくり、村づくりに懸命。そこに「地方の時代」の息吹を感じとることができる。

㉘ バス路線 (2) 野津原・今市

肥後街道の宿場町



◀ 県の史跡にもなっている今市宿の石畳

■七回渡る七瀬川

野津原、今市は江戸時代に肥後街道の宿場町として成立した。街道は大分市鶴崎と熊本を結ぶもので、鶴崎を出たあと下郡で大分川流域に入る。滝尾から宮崎を経て光吉で支流の七瀬川を渡り、八幡田、雄城、稙田市村から木の上峠を越して胡麻鶴で再び川に出合う。このあと七瀬川を何度も渡って野津原の宿に着く。

七瀬川の名も、街道がこの川の瀬を七回渡るところから出たという。一の瀬は野津原宿の西のはずれで、いまも地名がある。二の瀬は宿の東のはずれ。そのあと三度渡り、六の瀬が胡麻鶴。最後の七番目は少し離れて八幡田と光吉の間である。

現在、大分市街地からは国道 210 号線

をたどり、木の上から同 442 号線で胡麻鶴へ。このあとずっと右岸を進んで野津原に入る。町なみの入り口と出口で街道は二度、直角に曲がる宿場の特徴を見せるが、最近になって南側にバイパスが通じた。

野津原を宿場町としたのは肥後藩である。関ケ原の戦いのあと、加藤清正は肥後一国を有する大名となったが、彼はそのうち天草の地を辞退、代わりに豊後国内に 2 万石を欲しいと申し出て許された。これで豊後には久住、野津原、鶴崎、佐賀関などの肥後領が生まれ、彼はこれをつないで熊本から瀬戸内海へと九州を横断する参勤交代道を確保した。

熊本～鶴崎はおよそ 120 キロで、行程は 5 日間。したがって、この間に肥後では大津、内の牧、豊後では久住、野津原に藩主宿泊の御茶屋が置かれ、それを中心に町が整備された。

■一直線につなぐ道

各宿場の位置、さらに街道の道筋は熊本～鶴崎を結ぶほぼ一直線上にある。日本の各地を測量、正確な最初の地図をつくったのは伊能忠敬だが、彼が肥後街道を測ったのは文化 6 年（1809 年）のこと。それより 200 年ほど前に、九州の東西を直線に近い線で結び、その間に宿場設置のための飛び領を要求した清正はさすがに非凡の人物だった。この道と宿場は藩主が細川氏になってさらに整備された。

七瀬川は野津原付近で大きく曲流しており、宿場はそれを東北西の自然の堀とし、町なみは一筋だけ。それが東と西の端で直角に近く折れ、コの字形となっている。これも防衛を考えてのことである。

大分市中心街から野津原まで 13 キロ、今市まで同 26 キロ。野津原の南には障子岳や御座ケ岳などが連なり、県民の森として整備が進められている。障子岳の肩にある宇曽神社は女人禁制の山で、彼岸の中日だけ女性も登れる。中腹に「しあわせの丘」「のびゆく丘」など。

町筋中央部の北側に、川を瀬にして御茶屋が設けられ、それを守るように藩士の宿が配された。藩主滞在の場合は東西二カ所に木戸も置かれたそうである。御茶屋の位置はいまの東部小学校のところで、校庭の南側、町筋からちょっと入って清正をまつる加藤神社（野津原社）がある。

このほか、中央部の北側に手永会所や人馬会所、それに火番所、火防池床なども置かれていた。宿場が特に意を注いだのは防火で、道路の両側に防火用水を兼ねた水路があるほか、道路に直角に火よけ山が三カ所に築かれていた。さしずめ防火シャッターというところである。

文久 4（1864）年、幕府の軍監奉行だった勝海舟が、坂本龍馬とともに佐賀関～長崎の旅の途中にここに泊まった。

■今市宿の石畳道

野津原宿を西に出た街道は坂にかかり、竹矢から湛水に登り、山つきの道をたどって今市の宿に着く。バス路線は 442 号線をたどって石合（いさい）から今市に行くが、近年、昔の街道にほど近く立派な道がつくられ、大分市から久住方面に行くのがずいぶんと便利になった。

今市は野津原町でいまは大分郡に入っているが、かつては直入郡で、岡藩領だった。岡藩の中川氏はもとより、細川氏も参勤交代の旅でここに休憩した。やはり一筋の町で、中央部で二回ほど直角に曲がる。

道にはいまも石畳がよく残っており、県の史跡になっている。町はずれに彫刻のある楼門を持つ丸山神社、さらに少し離れて、いまでも「茶屋場」の看板を残す小さな家が見られる。明治時代までは、街道の利用者も多かったそうである。

⑦⑨ バス路線 (3) 志高湖・城島高原　奥別府のレジャー地

◀ 観光客でにぎわう城島高原

■目玉の観光ルート

九州横断道路は、大分、熊本、長崎の三県を結ぶ観光ルートである。別府市の国際観光港を起点として、奥別府と呼ばれる城島高原から由布院盆地、水分峠、小田・山下の池、飯田高原、牧の戸峠、瀬の本高原、阿蘇山、熊本市とたどり、フェリーで雲仙に渡り、長崎市にいたる約 300 キロ。

ルート設定は既存の部分を利用したところも多いが、中心となる九重山群を越す「別府～阿蘇道路」は日本道路公団が 4 年近い歳月をかけて建設、昭和 39（1964）年 10 月に開通した。

それまで、九州を横断する鉄道は久大、豊肥の両本線、国道には 210 号、57 号の両線があったが、その両動脈の間にはさまれた九重山群は〝九州の屋根〟といわれる雄大な景観を持ちながらも、交通的に不便。登山者は多かったが、一般観光客は近づきにくかった。

そこに、この道路が開通、210 号と 57 号を連結したのである。当然のことながら観光客は急増、九州の観光の目玉商品となったばかりか、産業面でも大いに活用されている。

■草原に開いたひとみ

志高湖、城島高原は、別府から山間部に入った横断道路が最初に出合う景勝地である。市街を離れて坂にかかった道は、鶴見岳にかかるロープウェイ高原駅を経て、鳥居で高原部に登りつく。鶴見岳の火の神、火男火売（ほのおほのめ）神社の鳥居が立っている。

ここから横断道路にちょっとわかれ、南東に少し入ると志高湖がぽっかりときれいな水のひとみを開けている。標高 580 メートル。一周およそ 1.5 キロ。小鹿山（728 メートル）など 600 ～ 700 メートル級の山に囲まれた湿地だったのを、かんがい用にせき止めて造った湖である。由布・鶴見山群を映す明るい湖面。ボートが浮かび、コイが泳ぐ。ほとりには市民国民宿舎「しだか」はじめバンガロー、ヒュッテ。周辺の草原は散策にもってこいである。

さらに 1 キロほど行くと小さな神楽女湖。また鳥居と志高湖との間にはレジャー施設「志高ユートピア」があり、船原山にリフトもかかっている。

＜メモ＞
周囲にある名所旧跡等（駅からのおよその距離）
◇別府市中心街からロープウェイ高原駅まで 10 キロ、鳥居まで 11.5 キロ、志高湖まで 13 キロ、城島高原まで 14 キロ、猪の背戸まで 15.5 キロ、由布岳登山口まで 18 キロ。鳥居から東山、あるいは城島を経て由布川峡谷方面へ行くこともできる。志高から神楽女湖などにもバスあり

■のびやかな高原

鳥居に戻って横断道路を行くと、やがて城島高原である。鶴見岳の南のふもとに当たり、標高 700 ～ 600 メートルの南下がりのゆるやかな草の原。南には九州山地の山々が遠く望まれ、北西には豊後富士の由布岳がのしかかるように迫っている。バス停留所のそばに高浜虚子親子の句碑が立つ。

大夕立来るらし由布のかき曇り　虚子
ここに見る由布の雄岳や蕨狩　　年尾
これがこの由布という山小六月　立子

高原には戦前からホテルがあったが、本格的に開発されたのは戦後。新しいホテルのほか、北ヨーロッパ風の農園や牧場、そしてさらに「城島モートピア」として各種のスポーツ、レジャー施設が用意されている。

高原を南に少し下ったところに城島の昔からの集落。由布川はこのあたりから次第に大地を深くえぐって行くようになり、やがて峡谷となる。

横断道路をさらに行くと由布岳と鶴見岳の間の猪の瀬戸を経て、由布岳登山口となり、あとは一気に由布院盆地に下る。

■伝説がいっぱい

バスのガイドさんが語る伝説。

女山の鶴見岳をめぐって、男山の由布岳と祖母山が激しく争った。結局、恋の勝利者はハンサムな由布岳となった。祖母山は日向との国境まで遠く去り、深い樹林をまとって身をひそめたが、去るに当たって悲しみの涙を滝のように流し、それが溜まって志高湖となった。

城島の集落にある日、旅の僧が訪ねてたわわにみのる柿（カキ）をひとつと所望したが、村人は「これはしぶ柿だ」といって断った。僧は「この村の人は鬼のような人だ」といって去り、その後、おいしい甘柿は本当のシブ柿となってしまった。僧は弘法大師。鬼島といっていたのが城島になった。

このほか、伝説はたくさん。小鹿山ではらみ鹿（シカ）を殺し、それを悔いて僧となった革聖（かわひじり）こと行円上人の話、あるいは志高湖の竜神、猪の瀬戸の狐（キツネ）などなど。とりわけ由布岳は伝説の宝庫といってもさしつかえなかろう。

⑧⓪ バス路線 (4) 水分峠・小田の池

草原、樹林の中の湖

◀ 210 号線と九州横断道路はここで分かれる

■文化圏も分ける

別府から山を越して来た九州横断道路は由布院盆地に下ったあと、再び登りにかかる。福万山の南、湯無田高原で県立青年の家、青少年スポーツセンターの前を通り、やがて小さなトンネルをくぐって水分峠。

大分川と玖珠川の水を分ける水分峠については、久大本線の野矢駅のところで若干ふれた。標高707メートル。国道210号線と九州横断道路はここでわかれ、横断道路は有料区間「別府～阿蘇道路」となる。

古代から近世まで、由布院と玖珠を結ぶ道は谷沿いではなく、ずっと北の日出生台高原を通っていた。水分あたりに佐賀県道（210号線の前身。佐賀県に通ずることから）の峠が開かれたのは明治２８年である。当時の峠はもう少し南だったが、急坂だったため大正元年に現在の水分峠に路線が変更された。

しかし、その道も難所。峠は水を分けるだけでなく、文化・経済まで分けていた。つまり、由布院は大分・別府へ、玖珠は日田へと結びついていったわけである。

■道路づくりに悲鳴

峠が開通して以来、昭和に入って戦後にいたるまでの道は、南由布駅近くの内徳野、あるいは上津々良から登っていた。峠越しは苦労したもので、ふもとにはちょっとした宿場が出来ていたほどである。

この難路を解消するためと、峠を直接に由布院盆地と結びつけ別府とのつながりをよくする狙いから、横断道路計画とともに新道建設が図られた。しかし、なにしろ大工事。そこで自衛隊の力を借りることになり、昭和39（1964）年に現在の道路が開通した。山腹をけずり、谷を埋めるのに、さすがの自衛隊も悲鳴をあげたものである。

ところが、国道210号線が別府～由布院道路から現在の大分川沿いに指定変更されると、再び南由布駅付近から登る道が欲しくなった。盆地の中に入らず、県立青年の家の下方に出る道が考えられ、昭和56（1981）年に通じた。おかげで、水分峠もいまは難所とはいえなくなった。

＜メモ＞周囲にある名所旧跡等（バス停からのおよその距離）

◇由布院駅前から県立青年の家・青少年スポーツセンター前まで４．５キロ
◇水分峠まで７．５キロ
◇小田の池まで１４．５キロ
◇山下の池レークサイドホテルまで１６キロ
◇山下の池には一周道路がある。また、湯平温泉、湯平駅方面にもレークラインと呼ぶ車道が通ずる。

峠から有料区間に入った横断道路は野稲岳の東山腹を巻いて行く。由布院盆地と由布岳、城ケ岳などの展望がよい。ほどなく小田の池停留所で、料金ゲートがある。

■横断道路の湖地帯

ここは山上の湖地帯。小田の池、山下の池、さらに道路から見えない上方の山間に立石の池。

小田の池は標高 770 メートル、周囲およそ 1.5 キロ。草原に広がる浅い火口湖で、雨の多少によって広さが変わる。湿原をもっており、植物相は貴重なもの。冬には凍結して天然のリンクとなり、スケートを楽しむ人を見かける。

細い尾根をへだてて隣接する山下の池は一段低く、標高 760 メートル。代わりに広くて一周 3.5 キロほど。これも火口湖だったものを、発電用水源池とするため大きく広げられた。杉の林に囲まれ、深いため水の色も濃く、草原の明るい小田の池に比べて神秘的。湖畔にホテルが建ち、湖面には白鳥が泳ぎ、ボートが浮く。

立石の池は標高 850 メートル、周囲 0.6 キロと小さい火口湖である。

■竜神まつり雨乞い

湖には竜蛇伝説がある。一つは、山下に雄蛇、小田に雌蛇がすんでいて、雄蛇が絶えず小田の池に通っているという素朴なものだが、もう一つは蛇の魔性を語る。

立石の池のほとりに庵を構え、修業していた立石坊という若い僧を山下の池の大蛇が見染め、娘に変身して押しかけ女房となる。だが、ある日、蛇体に戻った寝姿を見られ、光る目で僧を見つめて恨み言を述べたあと、恐ろしい形相で山下の池に帰って行った。僧は怖さのあまり石となる。池畔の立石がそれだという。

竜蛇は水の神。山下の池のホテルの対岸、杉林の中にそこだけ雑木が茂るところに竜神がまつられ、雨乞（ご）いが行われる。そこで竹筒に水をくみ、村に持ち帰って田に注ぐ。昔は北九州一円から水くみに来た。村に帰る途中で止まるとそこに雨が降るといわれ、自分の村に降らせるため若者たちが駅伝方式で夜を徹して竹筒をリレーしたものである。

㊶ バス路線 (5) 九重登山口・牧の戸峠

1700 メートル級並ぶ九州の屋根

◀ 凍りつく厳冬の久住山

■朝日長者伝説の高原

湖の地帯を過ぎ、杉の美林の中を走っていると、やがて視界が開けて草原の大石原に出る。九重山群の山々が並び立ち、朝日台はそのパノラマの展望台である。目の下には千町無田の広い水田。その横をかすめ、草原の長者原を行く。クヌギ、カシワの疎林、点在する松。飯田高原の核心部だ。ほどなく登山口に着く。

朝日台、長者原は、朝日長者伝説に由来する地名。千町無田は高原一帯を舞台とする同伝説の根源の地で、長者の屋敷と田のあった場所。

『豊後国風土記』には「この野は広大で土地は肥え、百姓はここに水田を開き、余った糧を田のうねに置いておくほど。大いに富みおごり、あるとき餅を的として射たところ、餅は白鳥となって飛び去り、その年のうちに百姓は死に絶え、やがて水田は荒廃した」とある。

これが長者の餅（もち）の的伝説。このほか扇で沈む日を招きかえした話、男池の雨乞いの話、鳴子川と音無川の話、財宝を山に隠した話、あるいは七不思議など、朝日長者伝説は全国に数多い長者伝説の中でも白眉(はくび)のもの。高原のロマンとして、広く語り継がれ、演劇やバレエにも取り上げられている。

■にぎわう登山基地

登山口の一帯は阿蘇国立公園九重地区の利用拠点であり、公園事務所やビジターセンター、広い駐車場を中心として、ホテル、旅館、国民宿舎、レストハウス、ドライブイン、キャンプ場はじめ、企業や大学の保養所なども群がっている。

横断道路のほか、久大本線豊後中村駅前から九酔渓、筌の口温泉を経由してくるバス路線もあり、バス運行の歴史としてはこちらの方がはるかに古い。夏山シーズン中には福岡方面からの直通バスもここを走る。

登山口から寒の地獄冷泉、星生温泉、牧の戸温泉などを経て再び料金ゲートを通り、登り詰めたとこ

＜メモ＞
周囲にある名所旧跡等（バス停からのおよその距離）
◇由布院駅から朝日台まで 25 キロ、登山口まで 31.5 キロ、牧の戸峠まで 37 キロ
◇豊後中村駅から登山口まで 16.5 キロ、牧の戸峠まで 22 キロ
◇登山口から中岳・久住山方面へは登り 3.5 時間程度、坊ケつる同 1.5 時間、大船山同 3 時間
◇牧の戸峠から中岳・久住山同 2 時間

ろが牧の戸峠。標高 1330 メートル。九州横断道路の最高地点で、ここから登山する人も多くなった。

■アルペン的な山群

九重山群は山陰火山帯に属する新生代の火山。現在は活動しておらず、硫黄山に噴気がみられる程度だが、『豊後風土記』は球覃峰（くたみのみね）とし「この峰の頂に火つねにもえたり」とある。このほか朽網山（くたみやま）という呼び方もあった。

山群は大きく東、中、西部に分けることができよう。東部は大船山（1787 メートル）はじめ黒岳（1587 メートル、久大本線小野屋駅などで紹介）平治岳（1643 メートル）などで、中部山群との間に九州岳人の心のふるさとといわれる坊ケつるの草原盆地を持つ。ここには湿原が広がり、一角に九州最高所の温泉であり、かつて山岳修行の地だった法華院をもっている。

中部は最もアルペン的な山群。九州本島最高峰の中岳（1790 メートル）はじめ、久住山（1787 メートル）天狗ケ城（1780 メートル）稲星山（1762 メートル）三俣山（1745 メートル）が競い立ち、火口湖の御池、そのすぐ下に水のない火口跡の空池、さらに砂の北千里、草の東千里、西千里があり、硫黄山が激しく噴気をあげる。

西部は牧の戸峠を境とし、黒岩山（1503 メートル）猟師岳（1423 メートル）一目山（1287 メートル）と低くなり、最西端に涌蓋（わいた）山（1500 メートル、宮原線麻生釣駅で紹介）をもちあげている。

■明るい南国の山

高さにかかわらず、九重の山々は草つきでやわらかく、明るい南国九州の代表的な登山地である。大船山を中心とするミヤマキリシマツツジの群落、久住山などのコケモモの群落は国の天然記念物。

例年６月の第２日曜日、ミヤマキリシマの開花期に山開き行事があり、７月の梅雨あけから８月いっぱいが夏山シーズン。各登山道に人の列が続く。春や秋、冬は比較的静かだが、登山者の訪れない日はほとんどない。

山を開いたのは宗教の修行者たちだが、硫黄山も硫黄採取のため江戸時代から開発され、岡領、肥後領、幕府領の境が接するところだけに重視されていた。その煙が登山口の方に吹きおろしてくると天候が悪くなる。

㉜ バス路線 (6) 湯坪・筋湯

日本一の地熱発電地帯

◀ 八丁原の地熱発電所

■谷ぞいの温泉群

九州横断道路から少しはずれるが、九重山群や飯田高原の西部にあって、観光のうえからも歴史的にも、さらに近年の火山エネルギー利用のためにも見逃せないのが湯坪、筋湯地区だ。横断道路から車道、あるいは自然歩道で入る道もいくつかあるが、バスは豊後中村駅前から九酔渓を登り、飯田高原の中心集落となる田野で登山口方面への道からわかれ、地蔵原の草原を右に見て湯坪の谷に入って行く。

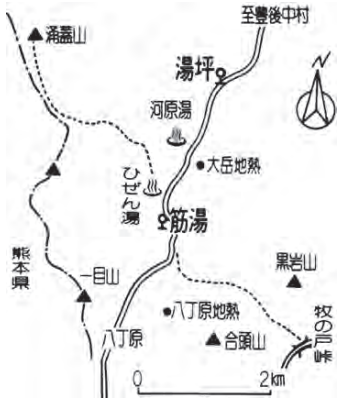
飯田高原は大きく見て東が田野、西が湯坪となり、かつては二つの村だった。田野には登山口一帯の長者原温泉群や筌の口温泉があるが、湯坪も名の通りに温泉の多いところ。10 世紀中ごろに浴槽が設けられたのが湯坪温泉の起源といわれ、そこから河原湯、大岳地獄、疥癬湯、筋湯、さらに小松地獄まで温泉と噴気地帯が続いている。湯坪あたりには民宿がたくさんあり、筋湯はホテル、旅館が密集する。筋湯名物は中央部にある共同浴場の打たせ湯である。

■温泉熱利用の農業

飯田高原は高冷地。全般的に稲作に関する条件は悪い。朝日長者の繁栄伝説はともかくとして、かつて荒無の地だった千町無田に水田を開いた裏にはなみなみならぬ苦労があったものだが、それがいま美田となりえたのも、寒さに強い品種が生まれ、それが導入されたからにほかならない。

その千町無田は標高 860 ～ 890 メートルあたりだが、湯坪付近では 1000 メートル付近まで水田があり、飯田高原で最初に稲が作られたところという。それを可能にしたのは温泉だった。苗代期にはまだ寒いが、人々は水田に温泉を入れて「湯苗代」で育てたのだ。温泉熱利用農業のさきがけともいえる。

そしていま、火山・温泉エネルギーを生かして、ここは日本第一の地熱発電地帯となった。昭和 28（1953）年に九州電力がテストボーリングを開始、同 42（1967）年に大岳で発電開始。出力 1 万 2500 キロワット、さらに 52（1977）年には八丁原地熱発電所が運転を始め、5 万 5000 キロワット



＜メモ＞周囲にある名所旧跡等（バス停からのおよその距離）

◇豊後中村駅から湯坪まで 17 キロ、河原湯まで１８キロ、大岳まで１９キロ、疥癬湯まで１９．５キロ、筋湯まで２０キロ
◇さらに車道で筋湯から八丁原地熱発電所まで１．５キロ、八丁原越まで２．５キロ。筋湯から牧の戸峠まで九州自然歩道４キロ。涌蓋山登山は疥癬湯からおよそ登り２時間。

を誇っている。冷却塔からごう音とともに噴き上げる真っ白な蒸気は壮観だ。

■肥後・豊後を結ぶ峠

その八丁原は筋湯温泉でバス終点から車道をさらに登ったところ。一目山と合頭山のふもとの草原である。ゆるやかな峠路となっており、標高1150メートル。

かつて八町辻と呼ばれ、九重山群を越して大分の玖珠地方と熊本の小国地方を結ぶ重要な道だった。

南北朝のころ、肥後の菊池武光軍が懐良親王を擁してたびたび大分の高崎山城を攻めたが、延文3（1358）年12月にここを通って退却した。これを志賀頼房が追撃し、峠の草原で激戦を交えている。

天正の島津軍豊後侵入のさいも、豊肥路から玖珠郡に入る同軍が通ったのも、地理的に見てこの峠だったらしい。湯坪の北の方、豊後渡で玖珠郡衆と交戦の話が伝えられている。

戦後はここがヤミ米の運搬ルートになったというが、八丁原に限らず、湯坪は軍勢の通過地としてたびたび迷惑をこうむったようだ。

■賊軍にされた村人

その一つとして、西南戦争のときの話を紹介しておこう。明治10（1877）年、西郷軍に呼応した中津隊の約30人が湯坪村に現れ、戸長（村長）を呼びつけて15歳以上の男子を人足として出し、隊士の数だけカゴを用意しろと命じた。３０ものカゴを作るのは大変。家の板戸をはずし、竹を伐（き）り、縄やむしろを集めてどうやら人の乗れそうなものを急造した。

これに隊士を乗せ、村人たちが交代でかついで涌蓋山の北の夫婦越経由で小国に抜け、数日がかりで阿蘇の二重峠まで送った。中津隊はここで西郷軍と合流、村人は解放されたが、帰途に賊軍に助力したというので警察隊につかまり質屋の蔵に放り込まれた。

ようやく許されて村に帰り着いたところ、次にやってきたのは官軍。こちらは筋湯に入湯してのんびりしていたが、ある日、戸長に人足を出せと通達。先日の苦い目でこりていたので知らぬ顔をしていたところ、呼び出されて抜き身をつきつけられた。平あやまりにあやまってことなきを得たが、農民には賊軍も官軍もない。戦争でつねに被害を受けるのは庶民である。

デジタルブック版
「ふるさとの駅＝各駅停車・大分県歴史散歩＝」（18）

2007 年 6 月 29 日初版発行
筆者　梅木　秀徳
編集　大分合同新聞社
制作　別府大学メディア教育・研究センター
発行　ＮＡＮ－ＮＡＮ事務局
〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15
大分合同新聞社総合企画部内

このデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたウエブプロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環として作成・無料公開しているものです。デジタルブックは、ほかにも多数。ネットに接続して上記ボタンを押し、「NAN-NAN」のサイトでご利用下さい。

大分合同新聞社　別 府 大 学

Back　Top